

Margaret Atwood の *The Handmaid's Tale* における “Survival”

－アイデンティティの喪失から自己再生の物語－

薬師英子

“Survival” in Margaret Atwood’s *The Handmaid’s Tale*
－ The Story of Stolen Identity and Self Reconstruction －

Eiko YAKUSHI

Abstract

The following study examines the survival of the heroine in Margaret Atwood’s *The Handmaid’s Tale*. The story takes place in the late 20th century where now A New Christian Right or New Puritans have taken over the power of what used to be the United States. The new regime, which is named after the biblical land of Gilead, returns to the Old Testament in a reaction against abortion, sterilization and what they consider to be dangerous kinds of freedom of the modern welfare state. The new government controls the society by hierarchy. The heroine, named Offred by the new regime, is placed as a Handmaid and sent to a commander’s house to bare a child for his sterile wife (since no sterile man is thought to exist in regime of Gilead). Under the severe conditions, Offred lives in fear and is forced to be passive and submissive to survive under the strict rules. By telling the story and reconstruction her memories, she gradually gains her power and emotions. Through the survival in Gilead she regains her identity and overcomes her victim complex.

序論

Margaret Atwood(1939-) の *The Handmaid’s Tale* は旧約聖書の地名を由来とした20世紀末の神政国家ギレアデ共和国を舞台とし、男女の身分がそれぞれ階級別にされた社会制度の中で女性としての生殖機能だけを存在価値とされ代理母のような役割を国に強制される女性を主人公とした作品である。語り手である主人公 Offred は、環境汚染や HIV 感染者の拡大、出

生率の減少に伴い人口が減少した状況下で現れた反動革命的な新政権の政策により再教育をされ、本名を剥奪され、足首に番号を入れ墨され、国家資源として、子どもを持たない高級官僚の下に一定期間奉公に出される。配属される3件のいずれの奉公先でも妊娠することができなければ、侍女たちは “Unwoman” 「不完全女性」(17) と認定され、コロニーと称された強制収容所に送られ、死ぬまで肉体労働を強いられる。

1 マーガレット・アトウッド、『侍女の物語』齊藤英治訳、新潮社、1990、p.17

¹抑圧的体制と父権社会の支配下に生きる物語の主人公オヴフレッドは著者アトウッドの全ての作品に共通する“Survival”を象徴する存在である。²また、強大で完全なる独裁体制の下で個人としてのアイデンティティを奪われ、物として扱われる主人公オヴフレッドは無力な“victim”「犠牲者」でもある。³

本稿ではではまず、主人公オヴフレッドの置かれている環境や内面の変化を物語構造とテキストから読み解き、彼女がギレアデ政権下での日々のサバイバルを通してどのようにして「受動的」で「無力な犠牲者」から「自己の再生」に向かうのかを明らかにする。また、作品の最後に置かれている“Historical Notes”『歴史的背景に関する注釈』の意義を検証し、著者アトウッドが読者や現代社会に対し何を伝えようとしているのかを考察したい。

1.

1-1：物語構造

The Handmaid's Tale 『侍女の物語』は主人公 Offred の語り15部と巻末に付属されている“Historical Notes”『歴史的背景に関する注釈』と題された1部とで構成されている。1部から15部は、第5部の“Nap”『うたたね』と題された部を除いて、奇数部は“Night”『夜』という題がついており、偶数の部は、2部が Shopping 『買い物』、4部は Waiting Room 『待合室』、6部が Household 『一家』、8部は

Birth Day 『出産の日』、10部は Soul Scrolls 『魂の巻物』、12部が Jezebel's 『悪女たちの店』、14部が Salvaging 『救済の儀』という題がそれぞれつけられ、昼と夜が交互に配置されている。ギレアデ政権下での侍女としての日常が客観的に語られている偶数部に対して、与えられた部屋で1人の時間を過ごす夜の奇数部では日々の出来事の回想だけでなく、ギレアデ政権以前の出来事が当時の主観的で自由な感情を交えて語られている。

主人公オヴフレッドは、出産率の低下で人口減少の危機にあるギレアデ国家で、出産することだけを任務とした“Handmaid”「侍女」として子供のいない政府の高官に配給される。彼女は再婚の夫婦と独身の私通をすべて姦通と見なし、女性パートナーの強制逮捕を執行したギレアデ政府によって集められた女性たちの第一陣で、逮捕後は「ラケル・アンド・レア・センター」(107) 別称「赤センター」(34) に収容され、侍女として再教育を施される。⁴侍女たちは血を象徴する赤い修道女のような服を身に纏い、外出する際には頭と顔を被う「白い翼」(16) とヴェールを被り、手袋をはめ、全身を周囲の目から覆い隠す。侍女たちは子どもを生む貴重な国家資源として対外的には優遇される身分であり、再教育センターの教育官である“Aunts”「小母」(10) からも自分たちを「真珠」のように貴重で穢れのない存在であることを意識するように教えられる。しかし、実際には侍

2 アトウッドによると、「カナダの中心的な象徴は、それが英語で書かれていようとフランス語で書かれていようと、疑いもなく生き延びること survival」で、これがカナダ文学の主要なテーマであると言う。また、survival というテーマと関連して、「カナダ文学のなかに多すぎるほどの犠牲者 victims を見いだす」と言って victim complex も同時に重要なカナダ文学の特徴であるという。森本まゆみ、Margaret Atwood の *The Handmaid's Tale* について、p.63、論集：神戸大学教養部紀要 / 神戸大学教養部 [編]43, pp.61-78

3 語り手・主人公の Offred (Of-Fred、即ち Fred に所属する者) は、司令官夫妻の監督下に置かれた自己を、子供や子猫、或いは囲いのなかの豚に譬える。アトウッドは Survival の中で、カナダ文学に現れる犠牲者意識の一例として、狩り立てられ殺される動物との自己同一化のテーマを指摘しているが、動物との同一化や小児感覚とは、アトウッドのヒロインたちにも共通する心理である。英語青年：the rising generation.136巻 馬場 美奈子 Margaret Atwood (カナダ)：The Handmaid's Tale (現代英語圏女性作家の話題作<特集> p.490

4 マーガレット・アトウッド、『侍女の物語』 齊藤英治訳、p.107. p.34

女たちは穢れた存在として疎まれ、他の女性たちの地位を脅かすものとして敵視されている。主人公のオヴフレッドは配属先で高官の家で家事を担う“Martha”「女中」(16)に「眉をひそめ」(17)られ、「病気か何かの悪運のように伝染する」(17)ものとして敬遠される。日課である買い物の帰り道、オヴフレッドと買い物のパートナーである Ofglen は流産した子どもの葬儀に向かう数人の“Econowives”「便利妻」(53)たちとすれ違う。同じ女性として「お腹に刺すような痛みを感じ」、「心臓の上に手をのせて、愛するものを失った見知らぬ女に哀悼の意を表す」(53) オヴフレッドたちに対し、先頭の便利妻はヴェールの陰からオヴフレッドたちを「睨みつけ」(53)、他の妻たちは「ソップを向き、歩道に唾を吐く」(53)。オヴフレッドの奉公先である司令官の妻 Serena Joy の彼女に対する嫌悪も例外ではない。月に1度行われる受胎の儀式直後、規則に反しオヴフレッドを部屋から追い出そうとするセリーナの声には「憎しみ」(105)がこもり、まるでオヴフレッド「の体に触っていると気分が悪く」なり、「体が汚れるとでも言いたげ」(105)な態度を示す。またすべての階級の女性たちを集めて行われる祈禱集会でも侍女たちは椅子もない「かつて映画館で観客を整理するときに使ったような絹を捻った緋色のロープで仕切られた」(231)領域に分離される。侍女たちは彼女たちの「汚らわしさから他の」(231)女性たちを守るために柵としてのロープで囲われ、他の女性たちから「見られ、値踏みされ、陰口をささやかれ」(231)る。オヴフレッドはそうした侍女としての自ら

の存在を「二本の脚を持った子宮にすぎない。聖なる器、歩く聖杯。」(148)と表現する。男女共に徹底した階級社会を作り上げたギレアデ政府は、侍女を国家資源の「物」として扱うだけでなく、女性社会においても穢れたものとして疎まれる完全に社会から切り離され孤立した存在にする。どこにも逃げ場のない過酷で非情な現実を生きるオヴフレッドにとって、夜の時間は唯一の自由な時間なのである。昼と夜の部は昼が身体的に動で感情が無と言えるほど客観的であるのと対照的に、夜部屋で静かに過ごす肉体的には静の時間は感情面では喜怒哀楽が豊かで私的な思いが語られている。

オヴフレッドにとって、夜の回想する時間は厳しい現実世界からの逃避行の場であるだけでなく、ギレアデ政権以前の自由があった生活の中で彼女の夫や娘、友人とともに過ごした時を思い出し、彼らがまだどこかで生きているという空想の物語を創りあげることが、孤独な現状を生き残る彼女の原動力になっている。また、馬場が指摘するように夜の追想と過去や日々の出来事を振り返り受け入れることは、現実からの逃避や絶望を意味しているだけではなく、オヴフレッドの自己再生につながっている。⁵

1-2；語り

『侍女物語』では作品を読み進める過程や内容解釈を行うことに読者の注意を惹きつけるため語りの手法が用いられている。読者の関心を深めるために語りには二つの特徴がみられる。一つに、ギレアデ政権下での日々の生活が語られる昼とギレアデ政権以前の生活が語られる夜と

5 更に、オヴフレッドは偶発的に甦る記憶の味を味わうだけではなく、個室の空間と夜の時間を逃避の場とし、過去から現在に至る自己の歴史を断片的に追体験し、また絶望に抗して、家族と再会する未来を創りあげようとする。語り手としてのオヴフレッドは、現実と言葉との乖離を意識し、時折同一エピソードを形を変えて語りなおす、自意識的な語り手であり、「これはすべて再構築です」と言うのだが、奪われた自己像を再構築し、失われた家族や友人を「生かし続ける」試みである。オヴフレッドにとって、夜は追想と逃避の時間であるのみならず、現実の逃走と自己再生の時にもなる。馬場 美奈子 pp.491

が交互になるように作品が構成され、現在と過去の出来事が交錯して描かれていることである。語り手である主人公オヴフレッドの記憶が断続的であるため、読者は否応無く彼女の語る断片的な物語を再構成せざるをえない。⁶さらに、オヴフレッドが侍女というギレアデ政権下で極めて限られた環境での生活を余儀なくされている立場であるため、彼女の知り得る情報も制限されている。物語の進行や主人公のおかれている状況が不透明なことで、一人称である語りは読者がより主人公に共感を持つ役割も果たしている。また、オヴフレッドの語りのもう一つの大きな特徴として、クライマックスの欠落が挙げられる。ギレアデ政権の体制確立間近、主人公は夫と共に娘を連れ車で隣国カナダに日帰りのピクニックを装い逃亡を図るが、その際夫や娘、自分自身がどのようにギレアデ政府の追手の手に落ちたのか、また逃れたのかは明確にされていない。又、Jezebel's「悪女たちの店」で再会した友人 Moira のその後の消息や再会時にモイラから知らされた母の生死の真偽、後に彼女の運命を委ねることになる司令官の運転手 Nick との関係の始まりや懐妊の真相、そして、最終的に彼女がギレアデ政府の追っ手から逃れ、自由を得ることができたかと言う最大のクライマックスも謎に包まれたままである。語りであることや同一エピソードを自らの言動や結末を変えて語る矛盾があることで読者の関心をひきつけるだけでなく、物語そのものの結末が読者の手に委ねられていることを示唆している。

語りの形式であることはギレアデ政権でのオヴフレッドの状況や彼女が意図していることを明確に示すための手段でもある。一つに、オヴ

フレッドが作品の冒頭で述べているように、彼女が「書くよりも話」すことを選んだのは、たとえ筆記用具を持っていたとしても彼女が「書くことを禁じられている」(49) ためである。この一節からオヴフレッドがギレアデ政権によって「言葉」を奪われ、思想や発言の許されない無言の存在にされていることがわかる。また、「自分が作り出した物語」を語ることで「自分に結末を決めることができる」(48) からであると語る。そして、彼女はこの物語を「架空の物語」とすることが「生き延びる」手段であると語る。これは暗に、この物語の結末でオヴフレッドが生き残ることが目的ではなく、この物語を語ること自体が彼女の「サバイバル」を意味していることを読者に伝えているのである。

作品の第1章では今後侍女として国に奉仕するために強制的に収容された再教育センターでの夜の様子が語られる。そこには、夜の薄明かりの中、見回りに来る、電流の流れている警棒を皮のベルトから皮ひもでぶら下げている“Aunts”「小母」たちに見つからないようお互いの本名を伝え合う場面が描かれている。ほとんど声を出さずにささやき、お互いの口もとを見つめて唇を読み、ベッドからベッドに、“Alma, Janine, Dolores, Moira, June.”と伝えられた5人の名前が記されている。このうち「ジューン」を除く前者4名はオヴフレッドの語りの中でその人物像が明らかにされている。また、物語のなかで「もうすぐ、夏服を着るのを許されることだろう。…それでも、七月と八月の蒸し暑い日にこれを着ていると汗だくになってしまう。」(64) とあることから、この物語が6月“June”を前後とする季節であること

6 deliberate contradictions within the work force us to re-examine a given scene or incident in light of its frame. Gamlin, Gordon. "Empowerment and the Politics of Fear: Margaret Atwood's *The Handmaid's Tale* as Context Gothic". *Polyglossia: the Asia-Pacific voice in language and language teaching*/ Ritumeikan Center for Modern Language Education, Vol.1(Apr.1999).P.9

が分かる。これらの描写から、作品の冒頭で語られた5人のなか唯一1人残された「ジューン」が語り手である主人公オヴフレッドの本名であることが推測される。⁷しかし、彼女は最後までその名を明らかにしない。主人公をある特定の人物として明確にしないことで、読者が物語を読み進める中で自分自身を主人公の置かれている世界に投影し、より深い共感を得るためだと考えられる。

1-3；反復される会話と人間関係

本作品は主人公オヴフレッドの規則的ですが固定化された日常を強調するため、同じような場面や会話が繰り返し描写される。また、取り替え可能な存在である侍女のオヴフレッドは常に彼女の前任者と同じような人間関係を辿ることになる。

オヴフレッドは司令官の家に配属されてから三日目に前任者が残した“*Nolite te bastardes carborundorum.*” (62) というラテン語らしき言葉を見つける。主人公であるオヴフレッドは司令官との夜の密会を重ねるなかでその言葉は司令官が少年時代に言葉遊びとして作り上げた冗談であると分かる。それと同時に、前任者のオヴフレッドも主人公と同じように深夜司令官の書斎で密会し、言葉遊びのゲーム「スクラブル」をしていたことを知る。そして、主人公のオヴフレッドも前任者のオヴフレッドと同様に司令官との秘密を暴かれ、秘密警察に連行される運命を辿る。しかし、主人公と前任者オヴフレッドの運命には大きな違いがある。前任者のオヴフレッドは秘密警察の手に掛かる前に自殺するが、主人公は死を選ばず、彼女を連行する秘密警察が彼女の恋人である司令官の運転手

ニックが手配した地下組織の人間であることを信じてその身を委ねる。

日常の中で強調される反復に侍女同士で交わされる挨拶が挙げられる。買い物のパートナーであり、互いの監視者でもあるオヴグレンとオヴフレッドは常に同じ会話を交わす。お互いがパートナーであることを確認し合うと「子孫は幸いあるかな」という言葉に相手は「主の恵がありますように」(27)と決められた挨拶を返す。パートナーになって数週間後オヴグレンは主人公オヴフレッドが彼女と同様に反政府組織の一員であるかを確認するために組織の仲間内で交わされる合言葉を会話に盛り込み、相手の反応を伺う。物語の終盤でオヴグレンが反政府組織の一員であることが発覚し、秘密警察の手に掛かる前に自らの命を絶つと、別の侍女がすぐに配属され、新たなオヴグレンが主人公の買い物のパートナーとなる。この時、新たなオヴグレンと主人公との間で、作品の冒頭で自殺をした前任者のオヴグレンとオヴフレッドが交わしたものと同様な会話が繰り返される。交わされる会話の内容は同様だが、核心の質問をする立場は逆転し、相手が反政府組織であるかを探るために危険を冒してでも大きな賭けにでるのは、オヴグレンではなく主人公のオヴフレッドである。

物語はオヴフレッドの機械的とも思える侍女としての日課を繰り返し描写したり、同じ状況や会話を反復し、侍女が変わっても同じような人間関係を持つ人間を描くことで、徐々に自らの意思で選択をし、一個人としての存在を認識していくオヴフレッドの変化を浮き彫りにしている。

7 Since careful readers of the novel can deduce Offred's name from the list of names provided at the outset-for all of the names, with the exception of "June," are assigned to other characters as the narrative unfolds. Bouson, J. Brooks. "The misogyny of Patriarchal Culture in *The Handmaid's Tale*" ed. Harold Bloom. Chelsea House. 2001.p.44

1-4 ; “Historical Notes” の意義

オヴフレッドの46章15部の語りが終わると、巻末には『侍女の物語の歴史的背景に関する注釈』と題された西暦2195年に開かれた学会のギレアデ学シンポジウムの The Handmaid’s Tale の発見に関する学会発表の様子が描かれている。この学会の様子から読者は始めて物語が日記や手紙など文字として残された書簡ではなく、30本あまりのカセットテープに吹き込まれたもので、その構成も物語の表題も発見者である Pieixoto 教授と Wade 教授が命名した仮称であることが明らかになる。従来の考えであったならば、ゴシック小説や演劇にみられるように、巻末の注釈があることで、それまでの主人公オヴフレッドの物語は劇中劇のようなものでその信憑性は薄くなる。しかし、Gordon Gamlin が指摘するようにアトウッドはその伝統的な目的を覆している。⁸さらに、アトウッドはオヴフレッドの語りのなかで過去と現在を交錯させ、意図的に出来事の時系列を曖昧にしている。その結果、ピークソート教授はオヴフレッドの語る物語が想像のものであるのか、歴史的事実であるのかを断定できない。もしも事実をピークソート教授のように歴史学者的に捉え、オヴフレッドの言葉に懐疑心を抱くならば、ピークソート教授は彼女の物語を誤って解釈している可能性が高いことを示唆している。⁹

また、ピークソート教授がオヴフレッドの本

名が「ジューン」であることに気づかないことも教授がオヴフレッドの物語の真相を理解することができない不適格者 “inability” であることを暗示している。¹⁰さらに、仮称として付けた “The Handmaid’s Tale” に関して、「私のようにウェイド教授を個人的に知っている方ならおわかりいただけると思うのですが、彼（ウェイド教授）は意図的に駄洒落を含ませたに違いありません。特に、ここには「テイル（尻尾）」という単語の古代の卑俗的な意味が込められていると思います。じっさい、このサーガが扱っているギレアデ社会の段階では、ある程度までそれが争いの種になっていたわけです。」(319)と講義を切り出し、あたかもはじめから物語が “tale” = 「むだ話、作り話」であるかのような発言をする。さらに、ピークソート教授はオヴフレッドが反政府組織の重要な中継地点として存在するとした「地下女性鉄道」(320)を一部の歴史学者「地下脆弱鉄道」(320)と揶揄する。こうしたピークソート教授の発言やその発言に対する聴衆の反応から2195年当時に女性蔑視の意識が存在し、物語の信憑性が語り手が女性であるため揺らいでいる可能性も否めない。

しかし、その一方、著者アトウッド自身も述べているように、物語の最後に置かれた注釈には否定的な要素だけでなく、希望的な正の要素も含まれている。¹¹ピークソート教授の発言からギレアデ政権から200年たった2195年におい

8 Atwood uses the Chinese-box structure but subverts its traditional aim. Initially, the outer frame of *The Handmaid’s Tale* distances readers from the horrors of Gilead and fulfills other roles mentioned above. Its principal function to the featured academics as authorities, we accept their notion of Offred’s story as an insignificant contribution to their science. If, on the other hand, we see Offred’s narrative as moving document of an individual’s struggle for survival, then the social scientists are debunked as parasites, who continue to exploit Offred long after her death. Gordon Gamlin. P.10

9 So, if we cannot even depend on the reality of time as we perceive it, history and historian are certainly not to be trusted, which is exactly the conclusion to which Atwood would like us to arrive. Rigney. Babara Hill, “Alias Atwood: Narrative Games and Gender Politics” Harold Bloom. *Bloom’s Modern Critical Views Margaret Atwood*, Infobase Publishing, 2009. p.59

10 –the fact that the historian who reconstructs and comments on Offred’s tale does not know her real name is a “sign” of his “inability” to read Offred’s story. Bouson. J. Brooks. P.44

11 “Describing her intention in the closure, Atwood comments that *The Handmaid’s Tale*” isn’t totally bleak and pessimistic. “J. Brooks Bouson. p.59”

でも女性蔑視が存在することは明らかだが、現代に生きる私たちが200年前の17世紀を自由に研究し、その体制について自由な思案を述べるができるように未来にも発言や思想の自由があることを示唆している。

ギレアデ政権をその身で経験し、その時代に生きた当事者オヴフレッドの私的な語りに対し、『歴史的背景に関する注釈』は時代も性別も異なる人物が極めて学術的に語ることで、オヴフレッドの語りと対極的な役割を持っている。対照的であるからこそ「何か質問はありますか?」という最後の問いかけに読者は再びオヴフレッドの物語と対峙し、その物語の真偽を模索するのである。

2.

2-1 ; 略奪されるアイデンティティ

ギレアデ共和国では男女共にそれぞれ機能別に階級化されているが、父権国家的な要素が強いギレアデ政権の政策は特に女性たちに厳しいものである。女性たちは当然のようにそれまでのような職に就く自由や財産の所有といった権利を剥奪され、明確にその身分と機能を識別されている。女性たちは青（家庭管理を担う高官の妻）、緑（家事を担う女中）、赤（生殖機能として分割される侍女）、縞模様（すべての仕事を自らが担う身分の低い便利妻）、灰（犯罪者）と階級別の服装に身を包み厳しい人種隔離政策の中に身をおかれるだけでなく、読み書きも禁止され文字の禁圧政策さえも強制させられる。ギレアデ政権は女性のアイデンティティを奪い、彼女たちを取替え可能な対象物にすることで効果的に男性中心社会を建設する。こうした制度

の中で女性たちに思想的な自由はなく、個々としてのアイデンティティを認識するような言動や物を使用することを禁じられている。侍女たちは再教育センターで教育官である小母から “In the days of anarchy, it was freedom to. Now you are being given freedom from. Don't underrate it,” と教えられる。小母たちは侍女である彼女たちは猥褻な写真や映像、レイプといった性墮落や暴力の対象になることから「自由の身」になったと以前の社会体制を批判し、ギレアデ政権の正当化を図る。しかし、現実には侍女と奉公先の司令官とは master-slave relationship でしかなく、侍女は男性に消費される性的対象物でしかない。¹²生殖機能として国の資源である物として侍女を扱うギレアデ政権は、彼女たちから個人としてのアイデンティティを認識する最大の要素である名前を剥奪し、改めて彼女に Offred という名を与える。彼女の名前 (Of - Fred) は、つまり「フレッドの所有物」であるというギレアデ政権が侍女である彼女に強制する価値や社会的な定義そのものを示している。また、他の多くの注釈者が指摘するとおり、“offered” 「差し出す者」、 “afraid” 「恐怖」など、オヴフレッドが女性として性を提供させられる犠牲者であり、彼女自身が恐怖の中に生きているということを示唆すると同時に彼女の存在そのものが社会の恐怖の表れであることも内包されている。Gordon Gamlim は「作品を一言で表現するとするならば ‘dread’ であり、主人公オヴフレッドは常に自己消滅の脅威と存亡危機に晒され孤独と恐怖の中に生きている。」と述べている。¹³ギレアデ政権の犠牲者的要素が象徴される一方、“offered” 「差

12 Subject to the killing male rage which mutilates, dismembers, and destroys, woman is a sexualized and dehumanized object in a sadomasochistic master-slave relationship. Bouson, J. Brooks. p.45

13 If we had to choose one word to characterize the universe of *The Handmaid's Tale*, it would be “dread.” Offred -or June, lives under the constant threat of annihilation, and her transitory existence is marked by solitude and fear. Gamlin Gordon, p.9.

し出す者（与える者）」に歴史の体験した証言者として後世にその事実を伝え、知識を与える者として捉えることもできる。¹⁴また、物語の終盤でオヴフレッドが秘密警察でなく、恋人のニックの言葉通り地下の反政府組織の助けられたとするならば、彼女がギレアデ政権から解放され、“Off-red”「赤から離れ」たとも考えられる。

言葉を奪われているオヴフレッドにとって彼女の部屋に残されていた前任者の言葉とクッションに刺繍された“faith”「信仰」(67)という一言がオヴフレッドの生き残りの鍵を握っている。オヴフレッドは司令官の家に配属されてから三日目に押し入れの最も暗い影になった床の片隅に、ピンカ爪でごく最近に引っ搔いて書いたと思われる小さな文字を見つける。そこには“Nolite te bastardes carborundorum.”(62)と書かれていた。オヴフレッドはそのラテン語らしき言葉で書かれたメッセージが次にその部屋に入った「わたしに宛てて書かれたもの」(62)だと確信する。オヴフレッドはその言葉の意味を推測し、ひとり繰り返しその言葉をつぶやくことにささやかな喜びを感じる。彼女はその言葉を残した前任者の女性を自分と年代か自分より少し若い女性として思い浮かべ、その女性と大学時代の親友であった「気まぐれで、覇気があって」、「不遜な戦略家であった」(62)モイラとを重ね合わせる。やがてオヴフレッドは司令官との密会を重ねる中でその言葉が「奴らに虐げられるな」(202)という司令官が少年の頃に作り出した言葉遊びであることが判明する。司令官にとっては意味を持たないが、オヴフレッドにとっては祈りの言葉であり、侍女同士

で受け継がれた「禁忌」である言葉を唱えることがギレアデ政権に対しての抵抗を表している。

また、オヴフレッドは自分の生活する部屋の窓辺の腰掛ある小さなクッションのカヴァーに、どういうわけか文字の検閲を逃れた、“FAITH”「信仰」(67)という言葉を見つける。オヴフレッドはそれを自分に与えられた唯一の読み物として、その文字の上に目を走らせ数十分という時間を過ごす。常に監視され、いつ誰にどのように告発されるか予期できない状況にあるオヴフレッドにとって“faith”「信頼」という言葉は忘れていた未来に対しての希望を思い出させるきっかけとなる。物語の最後に、自発的な言動をし、ギレアデ政権に抵抗を示すようになったオヴフレッドがニックに“faith”を託し、身をゆだねる姿は象徴的である。

名前や言葉の以外にも、自らの姿を映す鏡が侍女の生活の中から奪われていることは彼女たちのアイデンティティを奪う象徴的な描写の一つである。¹⁵司令官の家の玄関に残された鏡に映る白い翼とヴェールで頭を覆い、赤く長いスカートとローブを身に纏ったオヴフレッドの姿は「魚の目のように凸状」(16)として「ゆがんだ影」(16)のようでしかない。また、司令官に政府公認の売春宿に連れられ、司令官に渡された他人の着古した下着とサイズの合わない靴を履かされたオヴフレッドは「悪趣味な化粧をして他人の服を着た何かのパロディー、中古品の飾りのよう」な「無残な姿」(275)として鏡に映る。受動的な日々を送り、アイデンティティを失った曖昧なオヴフレッドの姿が映し出される一方、彼女が自らの意思を持って決断を下す瞬間にも鏡が効果的に使われている。日課

14 Offred is praiseworthy in large part because she “offers” the stories of heroism that she witnesses, recording them for posterity. Cooke, Nathalie. *Margaret Atwood A Critical Companion*, Greenwood Press, 2004 p.125

15 侍女の個室から鏡が取り外されていることは象徴的である。鏡のイメージはアトウッドの作品に（特に *Lady Oracle*, 1976）に類出するが、鏡は投影を映すとともに真実の姿をも呈示するものだから、侍女は単に自らの肉体を見ることを禁じられているだけでなく、自己像を奪われていると言える。馬場 美奈子 p.490.

の買い物の途中、オヴフレッドとオヴグレンは「魂の巻物」(179)と呼ばれる店の前に立つ。その店には健康、富、死、誕生、罪の5種類の祈祷が印刷される機械があり、電話で注文を受けると機会が自動的に作動し、祈祷をプリントアウトしながら祈りの言葉を読み上げる。祈祷の巻物を注文することは敬虔さと政府への忠誠のしるしとみなされるだけでなく、夫の昇進にも役立つとされ司令官の妻たちは熱心に祈りを注文する。この時オヴフレッドは初めて店のガラス越しに、頭に被った白い頭巾に邪魔をされる横目からではなく、オヴグレンの目を「じっと見つめる」(180)のである。その瞬間、オヴフレッドは「まるで誰かの裸体を初めて見るような気分」(181)になる。そして、オヴグレンが「この機械の声を神様が聞いていると思います？」(181)と反逆罪に問われる決定的な質問をする。独裁的な神政国家で神の存在が絶対とされるギレアデ政権下で「破壊、扇動、不敬、異端」(181)と見なされる発言にどのような言動を返すのか、自らの命にも関わる大きな選択を迫られたオヴフレッドは「身を鋼のように固く」し、「いいえ」(181)と政権を否定する返答をする。オヴグレンが長い安堵のため息をつくとき、二人は「見えない境界線を手に手を取り合って超えた」(181)ように仲間意識を共感し、オヴフレッドは希望が彼女の身体の中から「木の樹液のように溢れ」(182)出てくるのを感じる。お互いの姿を明確に認識しながら、真実を語り合うこの場面はオヴフレッドのアイデンティティの回復とギレアデ政権への抵抗を示す重要な機転の瞬間である。

2-2；感情・感覚の喪失とその回帰

オヴフレッドとオヴグレンは日課の買い物の帰りには決まって“Wall”「壁」を見に行く。そこには政治犯やギレアデ政権で犯罪者とされる異教徒や同性愛者、墮胎を行った医師などの絞首刑された姿が晒されている。彼らの姿を目の当たりにするオヴフレッドは彼女の夫が医師でないことから、それらがいずれも夫ではないという安堵を感じる一方で、感情の欠落したような虚脱感を感じる。オヴフレッドは自分が「感じるのは、感じてはいけないことのはず」(43)と認識しながらも、目の前で繰り広げられる理不尽な出来事を客観視し、そこには常に「空虚さ」(43)が付きまとう。J. Brooks Bousonが指摘するようにオヴフレッドは正気を保ち、過酷な現状を生き残るために意図的に自らの体験することから感情を切り離し、その場にはおおよそそぐわに想像をし、空想の物語のように語ることで悪夢のような体験から自らを守ろうとしている。¹⁶

オヴフレッドは日常生活の中で特定の場所やもの、匂い、音などで思い起こされる過去の自由な生活の記憶を自分の感情を制御するために締め出そうとする。焼きたてのパンから立ち上り台所に充満するイースト菌はかつて自分で使うことのできた懐かしい台所や母親の記憶を思い起こす。入浴の際には目を閉じると石鹸の匂いから何の前触れもなく突然娘が現れ、「ベビー・パウダー、洗い立ての子供の肌、シャンプー」それに「娘のうなじの柔らかい後れ毛」(73)が彼女を苛む。しかし、日常生活の中で感情を押し殺し、正気を保とうとするオヴフレッドはその記憶に留まることを回避する。

オヴフレッドは物語の後半で彼女と関係を持

16 For Offred protectively distances herself from what she is experiencing: she “detaches” herself, she “describes,” finds “something hilarious” about the impregnation ritual(123; ch.16) Bouson, J. Brooks. “A Feminist and Psychoanalytic Approach in a Women’s College”, *Approaches to Teaching Atwood’s The Handmaid’s Tale and Other Works*, Ed by Sharon R. Wilson, Thomas B. Friedman, Shannon Hengen. The Modern Language Association of America, 2000.pp.124.

つことになる司令官の運転手ニックに対し、初めのころから五感を用いた表現で描写している。家庭の力仕事の雑務や運転を職務とする“Guardians”「保護者」(26)として司令官の敷地内に住み、女性も等級も与えられていないニックが「身にふさわしいほど卑屈」(26)な人物ではないと感じ、「どうも胡散臭」(26)く「鼠のように何か匂う」(26)どこか「場にそぐわない匂い」(26)のする人物であると描写している。主人公を含む登場人物の多くが新しい政権下で生き残るために個としての言動を制御して生活に順応しようとしている一方、ニックはギレアデ政権以前の昔の光景と変わらず「いかにも愛しそうに車を磨」(26)き、制服の帽子を斜めにかぶり、闇市で仕入れたであろう煙草を吸っている。オヴフレッドはそんなニックからは実際には鼠のような匂いではなく、「陽光を浴びて湿り気を帯び、煙にうっすらと覆われた、日焼けした肌の匂いがする」(26)であろうと想像する。ニックが司令官からの伝言を受けた夜に二人は衝動的なキスを交わす。その後セリーナに提案された密約をきっかけにオヴフレッドはニックと肉体的な関係を持つ。はじめは司令官との儀式と同様に受胎目的であったが、やがて愛情という感情目的で触れることによりオヴフレッドは身体的な感覚を取り戻していく。それまで侍女であるために物として扱われ失っていた女性としての感情や感覚を回復し、自らの本名をニックに語ることで個としてのアイデンティティを確立する。¹⁷

2-3；犠牲者意識からの離脱と権力の獲得

侍女であるオヴフレッドはギレアデ政権の厳

しい政策での制約の下、日々生命存続の危険を感じながら完全なる服従と受動性の生活を送っている。¹⁸

侍女の生活は日課の買い物と朝・昼・晩の食事、入浴、家政婦たちの噂話や侍女同士での店先でのささやき声でのわずかな情報交換だけで、それ以外では月に一回の性の儀式と稀に訪れる出産の儀式で成り立っている。ただ決められた時間に決められた場所で決められた行動をするだけのオヴフレッドはそれ以外の「手持ち無沙汰」で「有り余るほどの空っぽの」、「長い（ ）の中の空白」(78)の時間をただ待つことだけに費やす以外何もない。オヴフレッドはその自分が「ごしごしと洗われ、ブラシをかけられ、餌をたっぷりと与えられて待つ」「賞品用の豚のよう」(78)であると感じる。そして、自殺の道具として使われる恐れがあることからナイフが使えないためすでに細かく切られた食事の載ったトレイが運ばれると、まるで自分が“invalid”「肢体不自由者」であるように感じる。

2部 Shopping でオヴフレッドは、彼女と彼女の買い物のパートナーであるオヴグレンの後姿を見送る若い検問官たちの関心を寄せるために、腰を揺らし彼女の纏う赤い裾の長いスカートが振り動くよう意識的に違反的行為を行う。このときオヴフレッドはその行為に自分の持つ“power”を感じるが、それはあくまで“passive” (p.28) であると明示している。

オヴフレッドが受動的な言動と被害者意識から離脱し、力を認識するようになるには司令官との密会や司令官の妻セリーナ・ジョイとの密約、反政府組織の一員としてのオヴグレンとの仲間意識、そして司令官の運転手 Nick との関

17 お抱え運転手 Nick との関係は「触れる」欲求を満たし、肉体的感覚を呼び覚まし、真の自己回復へと導く。～。肉体的な再生を果たしたオヴフレッドは、言葉に一層弾みがついたかのようにニックに自己を語り、本名（アイデンティティ）を主張し、また処刑儀式に参加することに抵抗を示すのである。馬場 美奈子 pp.491-492.

18 “The Handmaids are forced to a life of utter passivity and submissiveness.” Bouson, J. Brooks. p.44

係が要因となっている。いずれも、相手の弱みを知ることや自らの命にリスクを背負うことで、オヴフレッドの言動は受動的なものではなく自発的で、彼女自身が責任を持たなくてはならない立場になる。

オヴフレッドは司令官との密会を重ねることで、夜1人で座って過ごすだけの受動的な空白の時間に「他に考え事ができ」、「時間をつぶすことができ」（176）るようになったと感じる。¹⁹オヴフレッドは運転手ニックから司令官が彼女に深夜内密に彼の書斎に来るように要請していると伝言を受ける。その夜、困惑し今にも泣きそうな表情を浮かべているオヴフレッドを書斎机の正面に座らせると、司令官はもったいぶりながらも恥ずかしそうに言葉ゲーム“Scrabble”をして一緒に過ごして欲しいと要求する。テレビで面白い番組がやっていない時に老いた男女や思春期の子どもたちがやっていたようなゲームを持ち出され、オヴフレッドは椅子から転げ落ち大笑いしたい衝動に駆られる。しかし、すぐに、女性が文字を読み書きすることが禁止された政策の下では犯罪行為である言葉を手にすることで、危険を感じながらも言葉の持つ力を認識する。ギレアデ政権の下で解釈された旧約聖書によれば“Blessed are the silent”「沈黙は美德」とされ、男性が“word”「言葉」を支配し、女性は沈黙を守ることが教義とされている。²⁰もしも女性が文字にふれる禁忌を犯せば三度目の罪を犯したときには手を切断される。その危険と引き換えにオヴフレッドは言葉と司令官の持つ権力を実感する。同時に司

令官の孤独という弱みを知ることで、精神的に優位な立場を得る。そして犠牲者として司令官の権力を容認するのではなく、「許し」という最大の権力のもとに司令官と対峙する。²¹密会を重ねる中でオヴフレッドは“Nolite te bastardes carborundorum”が“Don't let the bastards grind you down”という意味であることを知る。その言葉は司令官にとっては子どもが言葉遊びでつくりあげた冗談でしかなくとも、オヴフレッドには祈りの言葉であると同時に権力を支配する者たちを声の無い声で嘲笑う侍女から侍女に秘密裏に伝えられ、特別な意味を持つ。²²オヴフレッドは司令官との密会で言葉の力を得ることで司令官と交わされる会話や語りの中でのギレアデ政権に対する見識に政治的な抵抗を表すようになる。

さらに、オヴフレッドは司令官に対して精神的に優位な立場になるだけでなく妻のセリーナ・ジョイに対しても以前とは異なる力関係を感じる。司令官との密会が行われる以前は、ただ自分「が置かれている状況における彼女の役割ゆえに、ただ彼女を嫌い」（173）、セリーナ・ジョイも同様であると考えていた。密会が始められてから数週間後に行われた受胎の儀式の際、オヴフレッドは以前と同じようにセリーナから嫌がらせ行為を行われる。その時、オヴフレッドは以前のような単純な憎しみではなく、彼女に対してのセリーナの嫉妬心を感じる。オヴフレッドも「人が嫉妬をするのは、自分がないものを持っている相手に対してだけだ」（173）と認識しているように、オヴフレッドは自分と司

19 “When asked to meet secretly with the Commander in his study, Offred finds that these visits give her “something to do” and “to think about”(210; ch.26) and thus relieve the tedium of her life of passive waiting. Bouson, J. Brooks, p.123”

20 “Blessed are the silent” according to the revised Gileadean Bible. In Gilead, men have “the word” and women are rendered speechless. J. Brooks Bouson. Pp.52-53.

21 でも、これも覚えておいてほしいのだけれど、許しもまた一つの権力なのである。許しを乞うことは権力であり、許しを与えたり与えなかったりすることは、たぶん最も大きな権力なのだ。マーガレット・アトウッド、『侍女の物語』斉藤英治訳 p.146

22 it is also a whispered obscenity about those in power which is secretly passed from one Handmaid to another. Bouson, J. Brooks, p.54.

令官との間にセリーナが持ち得ない関係があることを確信する。セリーナに対しある種の支配感を感じる一方、本来はセリーナのものであったはずの領域に踏み込んでいるという後ろめたさや疚しさを感じる。オヴフレッドはそれまで自分が失っていた人間らしさを取り戻すことで、周囲の人間のらしさを認識するようになる。

仲間意識やギレアデ政権の実状、人々の隠された感情や秘密を共有することで、オヴフレッドはそれまで逃避していた現実と向き合い、自らの行動に今までにはなかった選択するという責任を負うようになる。オヴフレッドは自分に変化をもたらした相手に私的な感情を抱くことで、それまで逃避していたギレアデ政権の日常に目を向けるようになり、やがてそれまでの受動的であった無抵抗な姿に気づき、ギレアデの体制に抵抗を示すことで自己の再生を試みる。

結論

この作品は著者マーガレット・アトウッドが彼女の全ての作品を通して語るカナダ文学のテーマとする survival と victims complex を象徴する作品であると同時に、作品が物語形式をとりながらもその多くが過去の歴史や今現在も実在している社会問題を描いている。

アトウッドはこの作品を通して反フェミニストが声高に主張する概念が実現化されることでどのような社会が生まれるのかを立証しているのではないだろうか。²³女性を家庭に押し込め半奴隷化し、生殖機能だけを重視し女性の価値を縮小し、文字や言葉を奪い、取替え可能な存

在にすること。『侍女物語』は常に女性たちが苦しめられている男性支配社会と女性の性的搾取を刻銘に描いた作品なのである。この作品が読者により大きな衝撃と恐怖感を与えるのは、アトウッドが述べているように作品中で女性に強制される政策は時代や国を変えただけで、すべて歴史的史実を参考にしているからだろう。アトウッドはこの作品は「権力の思想」を考察したもので、「現在の私たちの社会に存在する社会理論の延長上の世界」を描いたものであると語っている。²⁴読者は、作品に見るギレアデ政権の独裁政治がすでに私たちの社会で起きた歴史的史実であることに恐怖を感じるのと同時に、歴史はほとんどその形を変えずに繰り返されるという不安に斯きたてられる。作者は物語の結末を読者に選択させることで、歴史や現実社会の抱える問題を提示すると同時に、読者の選択が社会のあり方を変える大きな一歩であることを伝えようとしているのではないだろうか。

参考文献

- Bloom, Harold. *Bloom's Modern Critical Views New Edition Margaret Atwood*, Infobase Publishing, 2009.
- Bloom, Harold. *Modern Critical Interpretations The Handmaid's Tale*, Chelsea House, 2001.
- Bouson, J. Brooks. "The Misogyny of Patriarchal culture in *The Handmaid's Tale*", *Modern Critical Interpretations Margaret Atwood's The Handmaid's Tale*,

23 Atwoodは著書 *Second words* の中で「この世で最も致命的な武器は人間の精神ですが、人間として何が望ましく何が望ましくないかを心に描くことができるのも、また精神だけなのです。どのような種類の全体主義支配も望ましくありません。」と述べている。

Margaret. Atwood. *Second Words: Selected Critical Prose*. Anansi. 1982. p.391.

24 注 "I didn't invent a lot" in *The Handmaid's Tale*, Atwood remarks. "I transposed to a different time and places, but the motifs are all historical motifs." Atwood describes her novel as "a study of power" and ... "logical extension of where we are now." Bouson, J. Brooks. p.42

ed. Harold Bloom. Chelsea House. 2001. pp.41-62.

Bouson. J. Brooks. “A Feminist and Psychoanalytic Approach in a Women’s College”, *Approaches to Teaching Atwood’s The Handmaid’s Tale and Other Works*, Ed by Sharon R. Wilson, Thomas B. Friedman, Shannon Hengen. The Modern Language Association of America, 2000. pp.122-127.

Cooke. Nathalie. *Margaret Atwood A Critical Companion*, Greenwood Press, 2004.

Gamlin Gordon, *Empowerment and the Politics of Fear: Margaret Atwood’s The Handmaid’s Tale as Context Gothic*, Polyglossia: the Asia-Pacific voice in language and language teaching/ Ritumeikan Center for Modern Language Education, Vol.1(Apr.1999).

Margaret. Atwood. *Second Words: Selected Critical Prose*. Anansi. 1982.

Margaret Atwood. *Survival The Thematic Guide To Canadian Literature*. House of Anansi.1972.

Margaret. Atwood. *The Handmaid’s Tale*, Seal Books, 1985.

Nischik. Reingard M. *Margaret Atwood Works & Impact*. Camden House. 2000.

Somacarrera. Pilar. “Power politics: power and identity”. Howells. Coral Ann. *The Cambridge companion to Margaret Atwood*. Cambridge University Press. 2006.

大塚由美子、サバイバルと抵抗の物語－*Margaret Atwood の The Handmaid’s Tale*－

伊藤節（編）『現代作家ガイド5 マーガレット・アトウッド』、彩流社、2008

馬場 美奈子 「Margaret Atwood(カナダ):

The Handmaid’s Tale（現代英語圏女性作家の話題作）〈特集〉」英語青年：the rising generation.136巻

森本まゆみ、*Margaret AtwoodのThe Handmaid’s Tale*について、論集：神戸大学教養部紀要 / 神戸大学教養部[編]43, pp.61-78)

マーガレット・アトウッド、『サバイバル－現代カナダ文学入門－』、加藤祐佳子訳、御茶ノ水書房、1995

マーガレット・アトウッド、『侍女の物語』、齋藤英治訳、新潮社、1990